

『海辺のカフカ』の敗戦後

―カーネル・サンダーズと岡持節子―

野中 潤

はじめに

日本近代にとって、アメリカとは宿痾である。

ひとまず、こんなふう¹に言明してみよう。

バブル経済崩壊にも、構造改革にも、六本木ヒルズ族の登場にも、〈アメリカ〉は影を落としている。高度経済成長も、安保闘争も、連合赤軍事件も、〈アメリカ〉と無縁ではない。もちろん、敗戦から占領期を経て、サンフランシスコ講和会議へと至る時代の変遷をたどる上でも、〈アメリカ〉を無視することはできないだろう。

さかのぼれば、一八五三(嘉永6)年、黒船が浦賀にやつてきて、日本国内が開国と攘夷、勤皇と佐幕の複雑な権力闘争に揺れた幕末から維新にかけての動乱期に、〈アメリカ〉という宿痾はすでに根を張り始めていたのかもしれない。

もちろん、幕末維新期や敗戦後に限らず、日本近代のいたるところに〈アメリカ〉を見出すことは可能だ。たとえば、大正から昭和にかけて、多くの日米未来戦記が書かれ、その一方でモダニズムが流行したという時代思潮の中にも、〈アメリカ〉は影を落としている。また、維新から六十年が経過し、明治が還暦を迎えた昭和の初めに、子母澤寛の三部作によつて新選組ブームが起こったり、島崎藤村の『夜明け前』が人びとに受け入れられたりしたのも、近未来の日米戦争が想像力の地平にあらわれるような〈アメリカ〉意識が、黒船の記憶を召喚したからだったのかもしれない。また、おそらく偶然なのだろうが、幕末を描きながら決して明治維新には到達しない時間の中に展開されている中里介山の『大菩薩峠』(一九一三―一九四一)が書き始められたのは、黒船来航と同じ「癸丑」^二の年のことである。日本近代にとっての〈アメリカ〉は、対象化することが困難な多くの入り組んだ問題群の中に横たわつて

いる。

日本近代にとって、アメリカとは宿痾なのである。

タイム・オブライエンやジョン・アーヴィングなど、多くのアメリカ文学を翻訳している村上春樹は、このような宿痾とは無縁の場所にいるように見える。アメリカを語るときの村上春樹は、日本を語るときと同じ村上春樹であり、とりたてて気負ったところも屈指したところも感じられない。アメリカだけではなく、ギリシヤを語っても、トルコを語っても、外界に対する距離感とは、日本の場合と変わらないように見える。

しかし果たして村上春樹は、敗戦後を経て、現在にいたるまで続いていると思われる(アメリカ)という宿痾と無縁の存在なのだろうか。

「否」と答えるべきなのだろうが、「否」と答えることはそう簡単ではない。村上春樹という作家にとって、(アメリカ)とはいったい何なのか。その端緒をつかむために、長編小説『海辺のカフカ』における(敗戦後)について考えてみたい。

一、カーネル・サンダーズとナカタさん

『海辺のカフカ』という小説の魅力を語る上で欠かせないキャラクターの一人に、カーネル・サンダーズがいる。

「ホシノちゃん」とその老人は呼んだ。よくとおるきんきんとし

た声だった。少し訛まががある。

「星野青年は呆然としてその男の顔を見ていた。「あんたは—」
「そうだ。サンダーズ大佐だ」

「そっくりだ」と青年は感心して言った。

「そっくりではない。わしがカーネル・サンダーズだ」

(第26章)

日本語では通常「サンダース」とするところを、英語の発音に忠実に「サンダーズ」と表記されているが、もちろん「カーネル・サンダーズ」とは、一九七〇年代に日本に上陸したファーストフードチェーンの老舗ケンタッキーフライドチキンの創業者Colonel Harland Sanders(一八九〇—一九八〇)のことである。その証拠に、この部分の直後に、「あのフライド・チキンの…」と訊ねた星野青年に対してカーネル・サンダーズが「そのとおり」と答える場面がある。そのあとに「サンダーズ大佐だ」と答えていることも、Colonelが「大佐」という意味であることをふまえれば、「カーネル・サンダーズだ」という答えと同義であることになる。

『海辺のカフカ』のカーネル・サンダーズは、高松市内の夜の街に忽然と現れ、「いい女の子がいるよ」と言って星野青年に近づき、「入口の石」の話を持ち出して、言葉巧みに神社の境内へと連れていく。そして、携帯電話でとびきりの女を呼び出す。

「ホシノちゃん、この子はきつと気に入ると思うね。うちの掛け

値なしのナンバーワンだ。おっぱいむちむち、肌はつるつる、腰はくねくね、あそこはぐしよぐしよ、ぱりんぱりんのセックス・マシンだ。車にたとえるならば、まさにベッドの四輪駆動、踏み込めば愛欲のターボ、指が包むは怒濤のシフトノブ、さあコーナーだ、とろけるギアチェンジ、よじきた追い越し車線まっしぐら、行くぞ、行くぞ、ホシノちゃん、見事に昇天だ」

「おじさん、けっこうユニークなキャラクターしてるね」と青年は感心して言った。(第26章)

『海辺のカフカ』という小説において、田村カフカは「カラスと呼ばれる少年」でもある。『変身』や『審判』などで知られるフランツ・カフカからとられている「カフカ」という名前は、チエ語で「カラス」のことだからだ。また、田村カフカの父である田村浩一は、「ジョニー・ウォーカー」でもあり、佐伯さんはカフカの母でもある。さらに、「カラス(KARASU)」という言葉のアナグラムになっている「さくら(SAKURA)」という名前の少女は、カフカ(≡カラス)の姉でもあった(1)。また、『海辺のカフカ』の奇数章の主人公と言える田村カフカと対になるのは、偶数章の主人公と言えるナカタさんだが、ナカタさんの名前のアナグラムにも「カラス」という言葉が隠されている。ナカタさんのフルネームは「ナカタサトル」である。ナカタサトル≡NAKATASATORUの太字部分の「K・A・S・A・R・U」を並べ替えると、「カラス(KARASU)」や「さくら(SAKURA)」という言葉が出来るのだ。また「ナカタサトル(NAKATASATORU)」から「カラス(KA

RASU)」を取ると、残りは「ナタト(NATATO)」になるので、「ナカタサトル(NAKATASATORU)→カラスと鈍(KARASUTONATA)」というアナグラムも成立する。そんなふうに見えるのと、鈍を持って森に入り込むカフカ少年や、鈍のような包丁でナカタさんの口から出て来た不思議な物体を切り刻む星野青年は、ナカタサトルという存在と二重化されているようにも思えてくる。

もちろんこれらのことは、小説を読みすすめる読者が、確信を持つてそうだと見なせるような明確さで描かれているわけではない。むしろ、はつきりとした確信を持たせないように描かれていると言った方がいいのかもしれない。にもかかわらず、多くの作中人物を同一存在の別々の現れとして二重化して受け止めたくなるような巧妙な誘惑が『海辺のカフカ』の随所に仕掛けられていることも確かなのだ。

カーネル・サンダーズも例外ではない。とうてい現実の人間とは思えない不可思議なキャラクターであるカーネル・サンダーズは、ナカタさんの肉体から離脱した幽体の化身であるかのようである。カーネル・サンダーズが登場した第26章からナカタさんが目を覚ます第30章までの偶数章を読んでいくと、カーネル・サンダーズが星野青年の前に現れたり、星野青年に電話をかけてきたりするとき、ナカタさんは必ず熟睡している。魂がぬけ出てしまったかのように、深くこんこんと眠っている。そして、カーネル・サンダーズが星野青年の前から姿を消したり、電話を切ったりすると、ナカタさんは決まって目を覚ますのだ。つまり、ナカタさんが眠るとカ

ーネル・サンダーズが登場し、カーネル・サンダーズが姿を消すとナカタさんは目を覚ますのである。入り口の石を開けたことでナカタさんがこんこんと眠ってしまった直後にカーネル・サンダーズからの電話が入る第36章の描き方などは、かなり思わせぶりの場面展開になっている。

そのようにして考えると、ナカタさんとカーネル・サンダーズには、意外な共通点があることに気づく。ものごとをすべからく正しい状態に整えようとする性分の持ち主であるという点だ。たとえばナカタさんは、「ホシノさんの背中を見ておりますと、骨がずれているのがわかりました。何かがずれておりますと、ナカタはこう、もとに戻したくなります」（第24章）と言っている。一方のカーネル・サンダーズは、「私の役目は世界と世界とのあいだの相關関係の管理だ。ものごとの順番をきちんと揃えることだ」（第30章）と言っている。カフカ少年が家出をして西へと旅立ち、最後に東京へと戻るといふ『海辺のカフカ』の枠組みは、何かがそこなわれてしまった世界を修復するための冒険譚という側面をもっているのだが、二人の性分はそのような物語の枠組みに合致するものであるとも言えよう。

もちろん二人には大きな違いもある。たとえば、肉欲とは無縁で性的に無垢なナカタさんと、美女をあやつり売春をあつせんするカーネル・サンダーズは、ジキルとハイドのように正反対のキャラクターである。また、チーホフのドラマツルギーについて語るカーネル・サンダーズに対して、ナカタさんは自分の名前さえ書くこと

ができない。カーネル・サンダーズは、「プラグマティカルな存在」とか「継続情報の感知処理の省略」などという言葉を使っているが、読み書きのできないナカタさんの語彙には、小学生に理解できないような抽象概念は含まれていないのだ。

文字を読むことができず、男女の性的な関係性とは無縁のナカタさんと、哲学的な言い回しを駆使しながら「セックス・マシン」を操るカーネル・サンダーズは、まったく対極的な存在である。しかし、だからこそ、二人は実は同一の存在なのだという理屈もあり得るだろう。まさに、ジキル博士とハイド氏のように。

カーネル・サンダーズは、「入口の石」を運び出すに際して、星野青年に向かって自分のことをこんなふうに説明している。

「いいか、さっきも言ったように、私にはかたちというものが無い
純粹な意味でメタフィジカルな、観念的客体だ。どんなかたちにも
なれるが、実体はない。現実的な作業をするにはどうしても
実体というものが必要になる」

「それで今のこの場合、俺っちが実体なんだ」

「そういうこと」とカーネル・サンダーズは言った。（第30章）

ナカタさんは、戦争中の不可思議な事件に遭遇するまでは、非常に頭の良い少年だった。野外実習で訪れた「お椀山」の頂上で、十六人もの小学生が突然意識を失って倒れてしまうという事件の中にあって、中田少年だけは何日経っても意識が戻らず、三週間

後によくやく意識を取り戻したときには、言語操作能力が損なわれてしまっていた。文字の読み書きができず、というナカタさんから失われてしまった言語操作能力が、「かたちというものがない」「純粹な意味でメタフィジカルな、観念的客体」としてのカーネル・サンダーズになったということなのかもしれない。

そして注目しておきたいのは、「カーネル・サンダーズ」がアメリカに由来する「資本主義社会のアイコン」(第30章)であり、Colonel(＝大佐)という言葉を通じて戦争の記憶につながっていることである。

二、岡持節子の手紙

中田少年をふくむ十六人の子どもたちが「お椀山」の頂上で次々に意識を失って倒れるという不思議な出来事があった三十年近く経った昭和四十七年十月十九日、引率していた小学校教師の岡持節子は、GHQで調査が行われたときには明らかにしなかった事件の真相を、精神科医の塚山重則に対する手紙という形で告白する。

長いあいだ封印されていた真相を、岡持節子はなぜ告白する気になったのだろうか。

三十年近い時をへだてて告白する気になった原因について、『海辺のカフカ』には明確な説明はなされていない。しかし、岡持節子を告白へと突き動かしたものが何であるのかについて、読者が推測

する手がかりは示されている。

それは「第12章」という文字と「拝啓」で始まる岡持節子の手紙のあいだにさりげなく記された「昭和四十七年十月十九日」という日付である。

真相を告白する手紙の中で謎の事件の鍵をにぎる出来事として重要視されているのは、岡持節子が事件前夜に見た夫との性行為の夢と、引率の最中の突然の月経である。

「お椀山」で謎の事件が起きたとき、岡持節子の夫は、兵士としてフィリピンで戦っていた。岡持節子は、新婚でありながら夫が応召したために独り寝を余儀なくされていたのだ。そんな岡持節子が、「ひどく具体的な性的な夢」を見る。夢の中で「獣のように交わり」、「言葉にはあらわせないほどの肉体の快感」を感じる。

目がさめたとき、あたりはほの暗く、私は妙な気持ちになっておりました。身体がどんよりと重く、腰の奥の方にまだ夫の性器の存在を感じておりました。胸がどきどきして、息が詰まりました。私の性器も性行為のあとのように濡れていました。それは夢ではなく本物の交わりであったように、ありありと切実に感じられました。お恥ずかしい話ですが、私はそのまま自慰をしました。そのときに私の感じていた性欲はあまりにも強いものであり、それをなんとか鎮めるためのものでした。

自転車に乗って学校に出勤した岡持節子は、子どもたちを引率

して「お椀山」へと向かう。子どもたちを連れて山道を歩いているときも夢の中の夫との「性交の余韻」を味わい、一種の放心状態の中で「お椀山」に登る。そして頂上に着くとまもなく、出し抜けに月経が始まってしまうのである。まったく予期していなかった出来事に動揺した岡持節子は、あわてて林の奥に入り、持参した手ぬぐいで応急処置をする。

出血は量が多く、私はひどく取り乱していましたが、学校に戻るまではこのままなんともつだろうと思いました。頭がぼんやりとして、うまく筋道を立ててものを考えることもありません。私はまた罪悪感のようなものを心に感じていたと思います。赤裸々な夢を見たことについて、自慰をしたことについて、子どもたちの前で性的な幻想にふけたことについてです。

このあと、林の中に捨てたはずの血染めの手ぬぐいを手にして、中田少年が現れる。衝撃を受けた岡持節子は、無我夢中で中田少年の頬を何度も平手打ちしてしまい、十六人の子どもたちを集団昏睡に陥らせるきっかけを作ってしまう。

つまり、「お椀山」の事件は、フィリピンにいる夫の記憶と血の記憶に彩られている。そして、岡持節子が長いあいだ封印していたこれらの記憶を呼び戻し、真相の告白へと駆り立てたものも、「フィリピン」や「血」に象徴される事件ではないかと思われるのだ。

じつは「昭和四十七年十月十九日」というのは、フィリピンのルバ

ング島で衝撃的な事件が起きた日である。敗戦後二十七年ものあいだ山中に潜伏していた二人の「日本兵」が、現地の警察部隊と交戦し、一人が死亡、もう一人が逃亡した。死んだのは一等兵の小塚金七。「最後の戦死者」と呼ばれた。いっぽう逃亡して再びルバング島の山中に姿をくらましたのは、少尉の小野田寛朗だった。公的には「戦死」していたことになっていた二人だが、じつは敗戦の事実を否認し、フィリピンの山中でゲリラ戦を展開していたのだ。小野田少尉は、小塚一等兵が「戦死」した後も潜伏を続けるが、説得に応じて投降し、一年半後に無事に帰国を果たす。

つまり、「昭和四十七年十月十九日」という日付から浮かび上がってくるのは、フィリピンで「最後の戦死者」が出たというニュースが、封印された真相の告白へと岡持節子を突き動かした可能性である(2)。

もちろん、事件が起きた日に、岡持節子がただちに小塚金七の死を知ったかどうかはわからない。テレビで速報が流れるまでの時差もあるだろうし、新聞で報じられたのはおそらく事件の翌日だろう。テレビの速報で知ってただちに手紙を書き始めたとしても、長い手紙を書くにはそれなりの時間が必要だ。銃撃戦で小塚金七一等兵が命を落としたその日に、岡持節子が手紙を書きあげたと考えるのは、不可能ではないにしろ、少しばかり不自然である。

しかしそれでも岡持節子の手紙は、「昭和四十七年十月十九日」に起きた事件と結びつけて読まれる権利を持っている。日付は、「拝啓」で始まり「敬具」で終わる岡持節子の手紙本文とは別

に「地の文」として記されているからだ。具体的には、「拝啓」から「敬具」まではカギカッコで括られているのだが、「昭和四十七年十月十九日」という日付は、「第12章」という章題と「拝啓」という文字のあいだに記されているのだ。「昭和四十七年十月十九日」という文字列は、岡持節子の手紙本文の言説レベルとは別の次元のものとして扱われている。したがってそれは、岡持節子が手紙を書いた日付を示しているというよりも、手紙の存在そのものと関連づけられた特権的な日付として読み解かれる権利を持つているのである(3)。

父と夫を戦争で亡くし、敗戦後の混乱の中で母までも亡くした岡持節子は、独身のままで小学校の教員を続け、数年前に身体をこわして入院したことをきっかけに塾の教師となつている。そんな岡持節子が、事件から三十年近くの時間が流れてから、なぜ真相を語ろうという気持ちになつたのか。「昭和四十七年十月十九日」にフィリピンのルバング島に突如として現れた「英霊」の死に衝撃を受け、封印されていた戦争中の記憶を解き放つ決意を固めた可能性を指摘することができるとしても、そこにはいったいどのような心理機制が働いていたのだろうか。

一つだけ言えるのは、手紙を書く行為の中に贖罪意識が認められることである。性的な夢を見て、自慰に耽つてしまったこと。そのことを子どもたちを引率している最中に想起してしまったこと。中田少年を何度も平手打ちしてしまったこと。事実を偽つて報告したこと。岡持節子の心の中に横たわる罪障感幾重にも折り重な

つている。こうした罪障感の重みが、小塚金七の死という事件に接することで耐え難いものとなり、告白へと突き動かされたのではあるまいか。しかもそこにはおそらく敗戦後を生きてきた一人の人間としての罪障感も加わっていると思われる。

第12章の手紙の中で、「お椀山」事件の真相を告白するに先立つて、岡持節子はこんなことを書いている。

ほとんどすべてのものは忘れ去られていきます。あの大きな戦争のことも、取り返しのつかない人の生き死にのことも、すべては遠い過去の出来事になっていきます。日々の生活が私たちの心を支配し、多くの大事なことが、冷えた古い星のように意識の外に去っていきます。私たちには日常的に考えなくてはならないことが多すぎますし、新たに修得して覚えなくてはならないことが多すぎます。新しい様式、新しい知識、新しい言葉……しかしそれと同時に、どれだけの時間を経ようと、途中で何が起ころうと、決して忘却することのかなわぬものがあります。すり減らない記憶があります。かなめ石のように自分の中に残るものがあります。

「お椀山」で起きた出来事の「重さ」を強調するこうした文言と対比されるのは、手紙の末尾に触れられている夫の死に関する記述の「軽さ」である。夫が「終戦の少し前にフィリピンで戦死」したとき、岡持節子はそれほどのショックを感じなかったという。涙さ

え流さなかつたという岡持節子を襲つたのは、絶望でもなく怒りでもなく、「ただただ深い無力感^二であるに過ぎなかつた。これを「軽さ」という言葉で表すことが妥当かどうかはわからないが、「かなめ石」のように重くわだかまつていた記憶の中に、「戦死した夫」は含まれていないのではないかと思われる。罪障感とともに刻まれた夫の性行為の記憶は残っているにせよ、「巨大な凶暴な戦争」によって、フィリピンの戦場にいる夫がどのような日々を送り、どのように死んだのかということは、あらかじめ記憶から排除されている。記憶されるべき記憶が、決して記憶され得ない場所にあるということが、岡持節子に深い無力感を覚えさせている根本的な原因なのではあるまいか。

注

(1)この点に関しては、拙稿『『海辺のカフカ』への(注釈)の試みーカラス、さくら、プリンス』(現代文学史研究『第六集、二〇〇六年六月)ですでに言及した。

(2)小森陽一は、『村上春樹論ー「海辺のカフカ」を精読する』(二〇〇六年五月、平凡社)の中で、岡持節子が「中田君を叩いた日」である一九四四年十一月七日に注目し、それがフィリピンの「レイテ決戦」において「多くの将兵を無駄死」させる重要な決定が行われた日であることを、大岡昇平の『レイテ戦記』(一九七一年、中央公論社)を引用しながら指摘している。興味深い一致ではあるが、日付の意味を云々するなら、手紙に先立って

特権的に示されている「昭和四十七年十月十九日」についても考えるべきだろう。

(3)ついでに言い添えておけば、「恥ずかしながら帰って参りました」で知られる旧日本兵の横井庄一がグアム島で発見されたのは、この年の一月二十四日のことである。また、「お椀山」の頂上で事件が起きた「昭和十九年十一月七日」は、ソルゲ(Richard Sorge)が尾崎秀実とともに絞首刑に処せられた日である。さらに、十月二十五日に行われた海軍特別攻撃隊による初の神風攻撃に呼応する形で、「富嶽隊」による初の陸軍特別攻撃(特攻)がフィリピンの航空決戦において敢行されたのも、「昭和十九年十一月七日」のことだった。

(のなか・じゅん)

